

# 波と風



## 理念

思いやりのある  
やさしい誠実な医療を  
提供します

### 基本方針

1. わかりやすい説明による安心・安全な医療を提供します
2. 最新の知識と技術による質の高い医療を提供します
3. 地域医療機関との連携を強化し、地域社会の発展に貢献します
4. 高度な専門性をもつ医療人の育成に努めます
5. 医療資源を適正に活用し、健全な経営を実践します

## CONTENTS

- 2~8P 新年挨拶
- 9P 診療科紹介 (泌尿器科)
- 10P 職場紹介 (手術室)
- 11P 職場紹介 (3A病棟)
- 12P 職場紹介 (管理課)
- 13~14P 第28回市民公開講座 がん講演会 について
- 15~16P 令和7年度がん看護研修会
- 17P 令和7年度国立病院機構優秀論文賞
- 18~19P 第79回国立病院総合医学会  
ベスト口演賞、ベストポスター賞
- 20P 第32回呉地区病院対抗ソフトボール大会に  
参加し連覇を果たして
- 21P 戴帽式を終えて
- 22P うちの部署の接遇キラリさん
- 23P 連携医療機関紹介 (谷口クリニック)
- 24P 我が家のスターたち  
寄付について、編集後記



## 新年のご挨拶

院長 繁田 正信

皆様、明けましておめでとうございます。本年も変わらず、宜しく願い申し上げます。

昨年を思い返してみると、最も輝いた日本人は誰だったでしょうか。私は大谷翔平だと思います。アメリカメジャーリーグの百戦錬磨の猛者達を相手に、投手としても打者としても一流の活躍を見せてくれました。その結果、ロサンゼルス・ドジャースはチーム史上初のワールドシリーズ連覇、大谷個人として3年連続4度目のMVP受賞を見事成し遂げました。中でもワールドシリーズ進出をかけたミルウォーキーブルージェイズとの第4戦での活躍は見事、と言うより御伽話の様でした。投げては7回途中まで10奪三振、無失点、打っては3本塁打、1四球とチームの勝利をほぼ一人で演じ切りました。漫画でも出来過ぎて書けない様なストーリーです。現地の解説者が、「勘違いしないで頂きたい。この様な光景は、リトルリーグでしか見ることが出来ない。我々は正に歴史的瞬間を目の当たりにしている。」と述べておられました。打って走って、投げては三振の山、並外れた才能の持ち主です。確かにそうなのですが、大谷翔平の輝かしい活躍の影には、きっと常人には決して真似出来ない地道な努力の積み重ねがあると思います。彼には普通の休暇はほとんどないのでしょうか。体をメンテナンスし、鍛え、バットを振っている事と思います。血の滲むような鍛錬の上に、皆が憧れる（呆れる？）活躍があるのでしょうか。今年はどうな素晴らしい活躍を見せてくれるのでしょうか。楽しみでなりません。

呉医療センター・中国がんセンターでは、昨年、外来化学療法センターを新設し、5月に運用開始となりました。ベット数も増え、設備も一新して、外来化学療法を受ける患者さんがより快適に、待ち時間も少なく治療を受けられる様になりました。また、放射線治療器も最新の機種に更新し、昨年9月から運用してお

ります。狙った部位以外の臓器に放射線が当たる事によって副作用が生じるわけですが、当院が使用している機器は、狙っていない部位には出来るだけ放射線が当たらない様にコンピューターで制御されており、より安全に放射線治療を受けて頂く事が出来ます。また2023年12月から運用開始した手術用ロボットダヴィンチXiは、泌尿器科では、腎臓がん（腎部分切除術）、腎盂尿管がん、膀胱がん、前立腺がん、膀胱子宮脱に、消化器外科では、胃がん、大腸がん、直腸がん、肝臓がん、膵臓がん、呼吸器外科では肺がん、縦隔腫瘍、婦人科では子宮体がん、子宮筋腫に対して行なっています。昨年は合計247件のロボット支援手術を行いました。土日祝日を除くと、ほぼ毎日1件はロボット手術が行われており、呉市民の皆様、安心、安全な、体に優しい手術を提供出来ています。

また、呉圏域の地域周産期母子医療センターは今まで中国労災病院と当院の2カ所が認定されておりましたが、本年4月からは当院1施設のみに集約化されます。ハイリスクなお産は、呉圏域では当院のみが可能となります。より安全で快適なお産をして頂ける様、個室を修繕して妊産婦をお迎えする様に準備中です。この集約化の理由として、産婦人科医不足が影響しています。さらに医師の働き方改革の影響で、24時間体制でお産を支えるために、産婦人科医師数が十分に確保される必要が生じるため、全ての病院に産婦人科医を潤沢に供給出来ない事も一つの理由です。ですが、最も大きな問題は、分娩数の急激な減少です。この現象は呉地域に限ったことではなく、全国的な社会問題です。少子高齢化もついにここまで来たか、と嘆きたくなる程、分娩数が減少しています。呉、江田島市の全分娩数は、月50前後で、かつての半分以下です。このまま行くと日本人が絶滅する勢いです。政府も色々な打開策を講じている様ですが、危機感が募

ります。

日本全体に目を向けると、昨年は熊の出没や被害が続出しました。東北の方では、尊い人命が失われた報道も流れました。亡くなられた方には、ご冥福をお祈り申し上げます。呉周辺では、熊より猪の方が頻繁に目撃されます。実際に私自身も焼山や広島呉道路などで猪を何度か目撃しています。子供の頃、呉の山で猪を目撃したことは一度もありませんでした。熊や猪は最近になって、行動を変えたのでしょうか。いや、そんなことはないと思います。昔は、人の住む場所と獣の住む山、そしてその両者の境界地帯があり、この境界地帯は雑草も刈り取られて見通しが良く、身を隠す事が出来ない。獣も警戒してこの境界地帯からは人里には出て来られなかったのです。また、昔からこの境界地帯には柿や栗が植えられており、間違っても獣が人里に近づいても、そこで腹を満たして、山に帰って行っていたのではないのでしょうか。昔の人は、山には獣が住んでおり、共存できる方法を身に付けていたのです。ところが、近年は、山に獣が住んでいると言う事を考慮していない、いや、山に獣は住んでいない、と考えているのではないのでしょうか。獣と人間の共存を真剣に考える時が来たのではないかと思います。

また、昨年は長く続いた自公連立政権が解消され、自民維新連立政権が誕生しました。また女性初の内閣総理大臣 高市早苗氏が選出され、近年行われてきた財政均衡化を打開し、財政出動に舵を切る方針の様です。国債の発行は、長く国民の借金、子孫に残る負の遺産、などと言われておりました。でも冷静に考えてみて下さい。日本円建ての国債が国民の借金になるはずはありません。親から子供が1万円のお小遣いをあげたとしましょう。親にとっては1万円の損失ですが、子供にとっては1万円の利益です。しかも親は日銀と言うお金を作れる銀行を所有している。いつでも親の損失は無かった事にできるのです。日本円建ての国債は日本政府の借金ではありますが、国民から見ると純粋な利益なのです。しかも返済義務はないのです。ギリシャなど海外の財政破綻した国は、米ドル建ての国債であったために財政破綻したのです。要するに親から1万円もらったのではなく、サラ金から借りた様なものなのです。財務省やマスコミに騙されては

いけません。今の日本は物価高騰、円安、少子高齢化、台湾有事を含む防衛力強化問題などなど、問題は山積みされています。総理大臣の負うべき責任は重大で、それこそ寝る間も惜しんで責務を全うされていることと思います。日本のマスコミは、政府が何か策を打つと、必ず、批判的な意見ばかりを並べ、良い方向に向かいかけた策を必ず逆方向に煽ります。もう少し、国益を考え、良いものは良い、と報道出来ないものでしょうか。

さて今年の十二支は午（うま）です。十干十二支では丙午（ひのえうま）になります。十干十二支は十干と十二支の組み合わせで、60年に1度、同じ組み合わせが巡って来ます。60歳の還暦はこの十干十二支が一巡りする事を表しています。丙（ひのえ）は十干の3番目で、火の要素を持ち、太陽や明るさ、生命のエネルギーを表すとされ、午（うま）は俊足で、人を助けてくれる生き物です。そのため丙午の年は、勢いとエネルギーに満ちて、活動的な年になると考えられます。江戸時代の八百屋お七の放火事件以来、日本では丙午の女性は男性を食い殺す、と言った迷信が広く流布されておりました。そのため前回丙午だった昭和41年は子供の出生数が激減した程です。今に至ってみれば全く根拠のない話です。丙午の女性の著名人は、秋篠宮妃 紀子様や歌手の小泉今日子さん、女優の鈴木保奈美さんなどが活躍しておられます。

最後になりましたが、今年はどうな年になるのでしょうか。皆様にとって新しい挑戦に光が差し、前へ進む力を感じられる1年になりますようにお祈り申し上げます。





## 新年のご挨拶

副院長 田代 裕尊

新年明けましておめでとうございます。良い年を迎えられましたでしょうか。

昨年も多くの上出来事がありました。海外ではアメリカ合衆国でのトランプ大統領就任から始まる関税による世界経済への影響、ウクライナやパレスチナ紛争、国内ではお米を代表とする食品などの物価高、熊被害、大規模火災や地震による災害など続いています。また医療においても、病院の赤字経営と大変な問題があります。

さて、今年も新年のご挨拶に何を話題にしようかと迷いました。私が呉医療センターに赴任して10年が経過しましたので、病院での出来事と合わせて消化器外科の現状と将来について少し考えてみました。私が医学部を卒業した当時（約40年前）は全例直視下による開腹・開胸手術でした。手術は執刀医、助手合わせて3～4人による共同作業で、第一助手は視野展開、糸結びを行い、執刀医による手術の進行を手助けします。第二、三助手は、筋鉤などの鉤により術野作りに専念するため鉤を固定する手は動かさず、また術野が見えないことが多く、当直明けが業務の時は寝てしまうことがありました。ただ術前にはしっかりと局所解剖や手術手順を勉強し、手術に臨むことで、より局所解剖や手術手技の理解と習得が深まったように思います。入局数年後、新しい手術手技として低侵襲手術（鏡視下手術）が始まりました。現在では、多くの胸腹部手術に標準手術として鏡視下手術が行われています。手術創が小さいことより術後疼痛が軽減され患者さんへの負担が軽くなりました。またモニター画面を見ることで全員が手術野を共有できることなど、多くの利点があります。消化器外科分野では、腹腔鏡下胆のう摘出術から始まり、現在では血管吻合を必要とする手術以外の食道から直腸、さらに肝胆膵領域のがんに対して標準治療となっています。さらに2010年前後からロボット手術が前立腺がんから開始され、泌尿器領域から消化器、呼吸器、婦人科、心臓血管領域に急速に適応が広がっています。当院でも一昨年から導入されました。従来の鏡視下手術のメリットに加え手振れがなく、多関節鉗子を用いてより精密な手術ができるなどの優位性を所有しています。一方、触覚が得られない、手術経費が

高くなり、病院の収益が少なくなるなどのデメリットもあり、まだまだ改善を要する手術手技ですが、近い将来、AIが搭載されるなど進化したロボットが開発されロボット手術が標準手術になるように思います。一方今後も従来の開腹手術を要する疾患はなくなることはありませんので、開腹手術から鏡視下手術・ロボット手術と多岐にわたる手技を習熟していく必要があります。これらの手術を効率よく習熟するためシュミレーターなどを利用した修練が重要になってくるかと考えます。

次に抗がん剤の進歩です。今まで固形がんに対する唯一の根治的治療法は外科療法でしたが、がん薬物療法も一部根治的治療になりつつあります。2000年頃までは抗がん剤はマイトマイシン等、副作用ばかり前面に出て、抗腫瘍効果による予後の改善はあまり見られませんでした。それ以降、この領域も急速に発展し、殺細胞性薬のみで病理学的に腫瘍の消失が得られるようになり、分子標的薬さらに免疫チェックポイント阻害剤の開発で、予後が年単位で延長され、さらに切除不要進行がんの患者さんがある割合で完解が得られるようになってきました。例えば治癒切除不能のMSI-highを有する大腸がんでは、免疫チェックポイント阻害剤の併用で5年生存率が70%前後の成績が得られるようになりました。今後、外科的治療を含めた集学的治療が益々重要になってくると思います。我々消化器外科医は、手術手技を磨くことは云うまでもなく、全身管理、がん薬物療法の深い知識と習熟すべき領域が沢山あり、消化器外科医の負担が増大していくのではと考えられます。消化器外科は大変な仕事ですが大変遣り甲斐のある領域です。今後これに見合うインセンティブがあるように願っています。

昨年、プログラミングを勉強し始めましたと述べました。進歩は今一つですが、なんとなくpythonを楽しんでいます。“好きこそものの上手なれ”、“継続は力なり”の実践を目標に今年も頑張りたいと思いますので本年も何卒よろしく申し上げます。



## 新年のご挨拶

副院長 大庭 信二

新年明けましておめでとうございます。旧年中、呉医療センターの運営に多大なるご理解とご協力を賜り心より御礼申し上げます。そして、2025年も各診療科・各部署・各委員会のメンバーの方々の努力のおかげで、診療業績そのものは飛躍的に向上しています。診療内容も各分野で新たな取り組みが行われており、呉地区の中核病院として申し分ないと自負しています。

本年、令和8年は「午年」です。古くから馬は力強さと、俊敏さ、さらには人との深い絆を象徴する動物として親しまれてきました。我々の暮らしを支え、遠くの地へ希望を運ぶ存在であり、常に前進し発展する象徴でもあります。午年に当たる本年に、私たちはこれまでの歩みを礎にさらなる飛躍を目指しましょう。また、馬は“千里を走る”とも言われるように、広い視野と柔軟な発想を持つことの大切さをも教示してくれます。私達も、目の前の課題にとどまらず、より広い視点で物事をとらえ、変化を恐れずに挑戦し続ける姿勢を大切にしていましょ。

昨今、社会情勢は急速な変化の渦中にあります。AIを中心としたデジタル技術の進展、働き方の多様化、そして地球規模の感染・環境変化への対応など、私たちを取り巻く環境は複雑さを増しています。そのような時代において、私たち一人ひとりが“何を大切に、どのように行動するか”が、これまで以上に問われているような感じがします。そもそも、私が生まれた1960年頃は昭和の「三種の神器」が普及し始めた時代でした。それは“白黒テレビ”・“洗濯機”・“冷蔵庫”の3つの家電製品を指し、これらは家庭の豊かさの象徴でした。白黒テレビは新しいメディアを通じた情報・娯楽の媒体として登場し、洗濯機は女性の家事労働の負担を大幅に軽減し、冷蔵庫は食材の家庭での長期保存を可能にし、買い物の手間を減らしました。幼少時代に、自宅に始めてテレビが来た時の感動を今でも思い出します。そして現在の令和に入ると新しい「三種の神器」が誕生しました。令和は新型コロナウイルスの流行により一人一人のワーキングスタイルが変化した時代であり、各個人が自分の時間を有意義に使うように変化しました。その中で登場したのが“4K/8Kテレビ”・“AI自動制御冷蔵庫”・“ロボット掃除機”です。テレビは長くなった在宅時間を楽しむためのアイテムとして開発されています。冷蔵庫はこれもまた在宅での料理を楽しむ時間が増えたため注目されるように

なってきたようです。ロボット掃除機に至っては日々進化し続けており、今では物をよけて進んでくれ、段差も乗り越えるようになってきており、私たちの掃除の時間を減らしてくれる十分な戦力になってきています。

では、病院はどうでしょうか。現在における病院の「三種の神器」とは、個人的には“電子カルテ”・“高精度診断治療機器”・“出退勤システム”と考えます。昨年末に最新バージョンに更新しました電子カルテですが、当院では2005年に導入されて以降3回の更新を行っています。紙カルテ時代を経験している者にとって、それはとても画期的なシステムと考えます。ところが、便利になったとはいえ、新たな規則がどんどん作られていくにつれ、入力する内容が益々増えていき、電子カルテに入力するために日常が謀殺される感じさえすることがあります。ですがともかく、新しいことを取り入れたらそれを使いこなす、電子カルテの進化をおおいに享受しましょう。高精度診断治療機器については、当院では一昨年血管撮影装置、昨年放射線治療機器が導入され、そして今年1.5T MRI検査機器のハイエンドモデルが導入される予定です。これら機器の進歩は著しく、診断治療のすさまじい発展を実感しています。ですが、いくら機器が進歩したといってもそれを使うのは生身の人間です。ここでもやはり、私達自身が学習を重ね、上手に機械を使いこなすよう求められています。三番目の神器として当院では、出退勤システムが導入され、働き方改革が奨励されています。このシステムは医療業界における減私奉公といった悪しき慣習から抜け出すアイテムとなっています。なぜかわかりませんが、ようやく病院では令和の時代になって導入されました。各人が自分のための時間をなるべく多く持つよう心掛け、病院のための人生ではなく、自分のための人生を歩んでいただけたらと思います。

最後になりますが、当院では来年1月に病機能評価を受ける予定です。これからの、1年の活動が評価の対象となります。前回の審査の主となったテーマは「多職種連携」でした。職員の皆様におかれましては、どうかお互いが風通しの良い連携を重ねて活動していただければ幸いです。

2026年が皆様にとって実り多き一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。



## 新年のご挨拶

統括診療部長 立川 隆治

新年あけましておめでとうございます。

昨年は観測史上最も暑い夏を記録し、東北出身の暑いのが苦手な私にとってもつらい夏でした。群馬県伊勢崎市で国内最高気温41.8℃を更新したのも驚くことですが、全国の平均気温も平年を+2.36℃上回り猛暑日地点数も過去最多となる最も暑い夏でした。さらに体感的に暑いと感じた原因は7、8月に雨が少なかった事でした。「夏場の記録的な高水温・少雨による高塩分」を主因とする広島の特産物の大量死など過去に経験のない被害も出ています。

これまではこれらは異常気象というワードで語られていましたが、異常ではなく恒常になりつつあるのかもしれない



## 新年のご挨拶

臨床研究部長 讃岐 美智義

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、穏やかな新春をお迎えのことと存じます。

コロナ禍という長いトンネルを抜け、ようやく「日常」が戻ってきたと感じられた昨年。当センターの臨床研究におきましても、久しぶりに現地開催された学会で熱い議論を交わし、あるいは国内外の研究者と膝を突き合わせて語り合う、そんな「熱気」が戻ってきた一年でした。おかげさまで、昨年の研究業績は外部資金獲得、論文発表ともに過去最高水準を維持することができました。ですが、私が数字以上に誇らしく感じるのは、そうした成果の裏側にある、職員一人ひとりの地道な努力です。多忙な日常診療の合間を縫い、時には悩みながらも真理を探究しようとする皆様の姿勢に、改めて深く敬意を表します。

さて、今年は「丙午(ひのえうま)」の年。陽気が極まり、万物が活発に動く年回りと言われます。私たちを取り巻く環境に目を向けますと、医師の働き方改革が始まって二年近くが経ちました。限られた時間の中で、いかに診療の質を保ち、かつ医学の進歩に貢献する研究を継続するか。正直なところ、この両立に頭を悩ませる場面も少なくありません。しかし、制約があるからこそ生まれる工夫や、研ぎ澄まされる集中力があるのもまた事実です。

本年は、これまで蓄えてきた知見を社会へ還元する「実

れません。農業においては様々な品種改良や生産地のシフトなどにより恒常となりつつある気象条件に対する対策が展開されていますが、このままこの気象条件が続くのであれば水産業では生産時期のシフトも考えざるを得ないと思われる。

医療業界においても過去に例のない「増収減益」といった現象が各病院で蔓延しています。物価や人件費の高騰が原因とされていますが、根幹には人手不足、中でも看護師や外科医不足は全国的な課題であり、経営状況とは別に人員確保が出来ずに閉院をせざるを得ない病院も出ており、これらの現象が異常ではなく恒常化しています。当院ではこれらの状況を少しでも改善するため本年からAI導入による業務の負担軽減を行い、今後の人口減少により更に進むであろう人員不足に対していち早く対応し、地域の皆様に安定したよりよい医療の提供を目指しますので本年も引き続きよろしくお願い申し上げます。

装)の年にしたいと考えています。研究においては、単に論文数を追うのではなく、その成果が目の前の患者さん、あるいは将来の医療にどう貢献できるかという「出口」をより意識してまいります。ビッグデータやAI活用など新しい潮流も取り入れつつ、あくまで臨床医としての視点を忘れない、地に足のついたエビデンスの発信を目指します。

また、治験の分野でも新たな挑戦が必要です。世界で使われている薬が日本に入っていない「ドラッグ・ロス」の問題が叫ばれて久しいですが、当センターは地域の砦として、この課題に正面から向き合わねばなりません。患者さんの通院負担を減らす分散型臨床試験(DCT)など、新しい手法も柔軟に取り入れながら、希望となる新薬を一日も早く届けられるよう、治験管理室の体制もさらに磨きをかけていく所存です。

そして何より、私が最も大切にしたいのが「人」です。ふとした診療の疑問を研究へと昇華させるプロセスは、医師を大きく成長させます。若手の先生方が失敗を恐れずに挑戦し、ベテランがそれを温かく支える。そんな「共創」の土壌を、今年も皆さんと一緒に耕していければと思います。

呉医療センター・中国がんセンターが、医療の最前線であると同時に、新しい「知」が生まれる熱い現場であり続けられるよう、私自身も微力ながら汗をかいてまいり所存です。本年が皆様にとって、健康で、そして実り多き一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



## 新年のご挨拶

看護部長 郷原 涼子

明けましておめでとうございます。

年々過ぎていく時間のスピードが増しているように感じます。これは充実した時間を過ごしている証でしょうか。昨年は日本国際博覧会『大阪・関西万博』が開催されました。少し落ち着いた頃に行ってみようと思っておりましたら、落ち着くどころか日に日に人気が増していき毎日の報道での人の多さに一步を踏み出せないままでした。キャラクターの人気は今も続いていますね。テレビ画面からの様子とマスコットを眺めながら行った気持ちにだけなっています。

2026年は「変化・再生」を意味する巳年から、「前進・成功・情熱」を意味する午年となりました。干支は「十干」と「十二支」の組み合わせで、「十干」「十二支」は、それぞれ独自の意味を持っているそうです。2026年の「丙午」の「丙」は十干では第3位で、陽の「火」を表し、太陽のような明るさや情熱、強い意志を象徴し、「午」は十二支の7番目に位置する年で「馬」を表し、馬は古来より力強さとスピードの象徴で、前進や開運を意味す



## 新年のご挨拶

事務部長 徳臣 雅彦

新年あけましておめでとうございます。

2025年は医療機関、とりわけ大学病院や公的医療機関の赤字経営に関連する報道が非常に目立った1年であったと感じています。

2024年改定の診療報酬上昇率とコスト増のバランスが崩れ、全国で6割以上の病院が赤字となり、病院・クリニックの倒産件数も前年より増加、地域医療の危機とされています。

しかしながら医療機関の経営問題については、2000年代後半から既に始まっており、診療報酬のマイナス改定が続くことによって収益圧迫が進み、地方の病院においては赤字が顕著化していました。2015年以降は高齢化に伴い医療需要は増加していましたが、急性期病院は過剰供給であり、病床利用率低下が問題となっていました。2020年からのコロナ禍においては、受診控えによる外来患者数や手術件数が減少し、多くの病院が一時的に大幅な赤字に転落しましたが、この時期には感染症病床確保料や診療報酬の特例加算などの大規模な補助金政

策もあり、補助金で黒字化した病院も多くありました。しかしこの間に構造的な収益改善がなされなかったため、補助金終了後、再び赤字化する病院が急増する結果となり、報道などにより顕在化したものと思われます。

現在の赤字の要因は収入面として診療報酬の低さ(特に急性期病院以外)や外来・入院患者の減少(人口減少や地域偏在)があり、支出面では、人件費の増加(医師・看護師の確保コスト)、医療機器・設備の更新費用、光熱費や委託管理費などの上昇があります。また、医療資源が分散していることにより、個々の病床利用率が低下し脆弱な収益構造となっています。改善策として診療報酬の大幅なアップが必須ではありますが、国全体の財政状況からすればあまり期待はできないかも知れません。以前より、医療機関は業務の効率化があまり進んでいないと言われており、今後、ICT導入やAIによる診療支援により人材配置の最適化が図られることによるコスト削減は収支改善策の1つになると思われます。

皆様、本年もどうぞよろしくお願いいたします。



策もあり、補助金で黒字化した病院も多くありました。しかしこの間に構造的な収益改善がなされなかったため、補助金終了後、再び赤字化する病院が急増する結果となり、報道などにより顕在化したものと思われます。

現在の赤字の要因は収入面として診療報酬の低さ(特に急性期病院以外)や外来・入院患者の減少(人口減少や地域偏在)があり、支出面では、人件費の増加(医師・看護師の確保コスト)、医療機器・設備の更新費用、光熱費や委託管理費などの上昇があります。また、医療資源が分散していることにより、個々の病床利用率が低下し脆弱な収益構造となっています。改善策として診療報酬の大幅なアップが必須ではありますが、国全体の財政状況からすればあまり期待はできないかも知れません。以前より、医療機関は業務の効率化があまり進んでいないと言われており、今後、ICT導入やAIによる診療支援により人材配置の最適化が図られることによるコスト削減は収支改善策の1つになると思われます。

2027年には新たな地域医療構想がスタートします。病床機能と医療機関機能が明確化され、病院の統廃合・再編等による非効率解消と連携強化が加速すると考えます。当院は呉医療圏の高度急性期医療を支え、かつ、地域の医療ニーズを踏まえながら、持続可能な病院運営を目指します。今後ともよろしくお願いいたします。



新年のご挨拶

薬剤部長 小川 喜通

新年あけましておめでとうございます。

近年の病院薬剤師不足は当院薬剤部まで及びまして、昨年は産休・育児休暇を取得するスタッフが重なり人員配置的に非常に厳しい1年となりました。幸い、繁田院長をはじめ幹部の先生方の後押しを頂き、外来患者さんの院内調剤を見直し等の取り組みにて、なんとか乗り切ることができております。

薬学部が6年生となった頃は、薬剤師人気が高まりまして、薬学部の新設校も多くできました。薬剤師が飽和状態になるのも時間の問題といわれておりましたが、現在も薬剤師不足は解消することなく続いております。2024年度の診療報酬改定では、薬剤業務向上加算が設定され、特定機能病院若しくは急性期充実体制加算1、2の算定病院より薬剤師の不足している地域の病院への薬剤師の派遣により病棟薬剤業務実施加算1への加点が設定されました。この取り組みにて薬剤師が不足している地域の病院を支援すると共に、お互いの業務の見直し薬剤業務を向上させようということのようです。当院は、派遣する側の立場の病院ですが、むしろ派遣して頂きた



新年のご挨拶

教育主事 花子 紀子

新年あけましておめでとうございます。

看護学校では、昨年3月に1学年80名定員の大型校として最後であり、第5次カリキュラム改正後初の卒業生58名が巣立ちました。そして、4月には普通校に完全シフトし、3学年ともに1学年40名定員の学校になりました。本校の建物は大型校仕様ですので、現在では広い教室、ベッドや教材が十分にある実習室などこも広々とゆとりのある学習環境です。そのような中で、人数が少ないからこそ団結力を強め、小さくてもやることは大きくあってほしいと願い、学生や教職員とともに今日まで走ってまいりました。

5月に開催された広島県看護学生連盟の広島・呉地区スポーツ交流大会（県下の看護専門学校8校）では、総合優勝し学生の底力を感じました。また、7月には校内にWi-Fiを完備していただきICTを活用した教育とともに学生の学校生活も充実しました。休憩時間には、インターネットに接続してギガ制限を気にすることなく楽しい時間を過ごす学生の姿も見られるようになりました。楽しい休憩時間を過ごすことで集中して授業を受けメリハリのある毎日を送っていただきたいと思います。また、Wi-Fiを活用して12月22日に「呉看護学校」Instagramを開設しました。今後は、広報クラブを中心に学生や職員が学校の様子、学校の魅力を配信していきます。

い現状です。

これらの薬剤師不足の原因の一つは、ドラッグストアやチェーン薬局の、高待遇の提示が影響の大きいところと見られます。そのため、薄給の病院薬剤師を希望される学生さんは非常に少ないのが現状です。学生の声を聞きますと、病院薬剤師は、「給与が安い」、「忙しい」、「当直がある・・・」という面にて不人気なようです。私も若い頃は、同じように思っていた時期もありました。しかし、病院薬剤師は、色々な疾患のことが勉強できますし、自分が習得した知識をチーム医療に参加することで患者さんの治療に生かせるという非常にやりがいのある仕事だと思っております。当院では、チーム医療が積極的に行われており、非常にやりがいのある環境にて仕事をさせて頂けています。

今後は、これらの事をさらにアピールし、病院薬剤師を目指してくれる若者が増えるよう取り組んでいきたいと思っております。



Instagramについては、学校ホームページでご案内しております。どうぞご覧になってください。そして、よろしければ「いいね」を押してください。それはきっと私たちへの応援と励みになることでしょう。

昨今の地域情勢を踏まえ、地域包括ケアシステムを支える人材育成することを柱とした新カリキュラムにおいては、種々ある改正の1つとして地域・在宅看護論の単位数が増えました。地域が加わったことで学ばなければならない範囲が拡大し、地域看護をいかに学べるようになるかが課題です。そこで、本校では「地域で暮らす人を支えるしくみ」という科目を設定し呉市役所福祉保健部の職員の方々に呉市の実情をふまえた講義および事例検討発表会ではアドバイザーを務めていただきました。それぞれのご担当分野の立場からご助言をいただくことでさらに学びを深めることができました。また、10月には、3年生が呉市総合防災訓練に参加しました。そして、今年の1月からは、地域・在宅看護論実習Ⅲで「諸島部におけるかかりつけ医の医療と看護、プライマリーケアを学ぶ実習」を開始します。医院の院長をはじめ職員の皆様が快く受け入れてくださったからこそ、この実習が実現したと思っています。このように呉市という地域の中で学んだ学生が、これから先どのように成長し地域に貢献できる看護師として育っていくのか楽しみでなりません。

さまざまな取り組みを行ってまいりましたが、これも本校の教育に皆様からのご支援、ご協力を賜っているお陰と感謝しております。これからも学生の確保に努め、地域の医療・看護を支える人材育成に取り組んでまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

診療科紹介

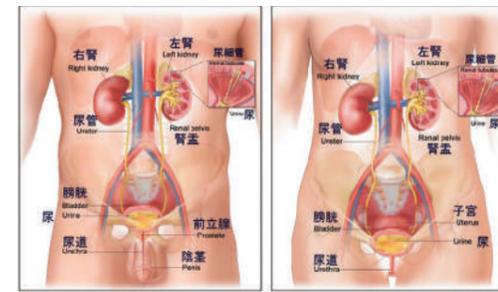
泌尿器科

泌尿器科診療における手術支援ロボットダヴィンチXiについて



泌尿器科科長 福岡 憲一郎

泌尿器科が扱うがん疾患は腎がん、腎盂尿管がん、膀胱がん、前立腺がん、精巣がん、陰茎がんと様々です。図のように、上腹部～骨盤までの広い範囲の臓器を扱います。転移がない場合には、手術によってがんを取り除く場合が多いです。手術では、これまで腹腔鏡を用いて行っておりましたが、2023年12月に手術支援ロボットダヴィンチXiが導入されて以降はダヴィンチXiで行うことが増えています。



ダヴィンチはもともとアメリカ陸軍が遠隔操作で戦場での外科治療を行う目的で開発された医療機器です。2000年に米国でダヴィンチ手術が始まり、本邦では2012年4月に前立腺がんの手術で初めて保険適用されました。以後、腎がん、膀胱がん、腎盂尿管がん、肺がん、直腸がん、胃がんなど適用が拡大しています。当院が所有するダヴィンチXiは第4世代モデルに該当します。旧機種と比べ、ロボットアームが細くなり、可動範囲が大幅に広がったことで、フレキシブルで繊細精

密な操作が可能となりました。

さて、ロボット手術が腹腔鏡手術に勝る点は何でしょうか。まるで体の中に自分の手を入れて手術しているかのような高い再現性、手ブレを補正してくれる機能、鮮明な3D映像・・・もちろんそれらもメリットですが、座ったままで楽な姿勢で手術ができる点も大きいと感じています。腹腔鏡手術では、体を捻じったまま手術したり、常に肘を上げた状態で手術したり、無理な体勢を取らざるを得ない場面が存在していました。翌日に肩や腰にハリや違和感を感じることもしばしばでした。ロボット手術になってそれらの疲労感の軽減を大いに感じています。歳を重ねるにつれ、体力の低下を自覚するようになり、疲労の少ないロボット手術のありがたみを感じています。

ロボット手術が腹腔鏡に劣る点も勿論あります。一番はセットアップに時間がかかることです。腹腔鏡ではポート挿入後すぐに手術操作が始められるのに対し、ロボット手術ではアームの取り付け、ポジションの設定などやることが多いです。導入して2年経過し、徐々に費やす時間は短縮されています。今では1日2件のロボット手術も可能となり、多くの患者さんにロボット手術を受けて頂けるようになりました。これからも最先端のロボット手術を安心・安全に提供できるようスタッフ一同研鑽を続けてまいります。



ロボット手術風景



ロボット手術をする繁田院長



## 手術室

看護師長 白石 久恵



## 3A病棟

看護師長 西田 香奈恵



手術室は一般手術室 8 室(令和 6 年 11 月に 1 室増室)、無菌手術室 1 室の合計 9 室があり、15 診療科の手術が行われています。



【9ルーム】

令和 6 年度の総手術件数は、緊急手術 461 件を含む 4759 件でした。手術室看護師は 2 交代制勤務をしており、常に麻酔科医が待機し、24 時間体制で緊急を要する帝王切開を始め、呉医療圏唯一の三次救急病院として様々な緊急手術に対応しています。

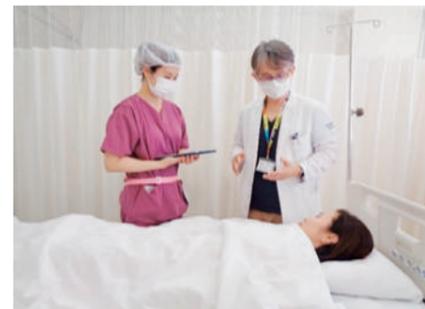
安全に手術が受けられるよう、手術手順や必要な機器等について、事前に医師と打ち合わせを行い、手術前には手術室看護師が患者さんの病室へお伺いさせていただき、手術に対する不安のお話を聞き、どのような流れで手術が行われるか等のオリエンテーションを行っています。手術を受ける多くの患者さんは不安や緊張があるため、少しでも安心して手術が受けられるよう、医師・看護師・臨床工学技士などのチーム全体で支援できるよう努めています。



【手術中の様子】

手術室では、帽子とマスクを着用しているため看護師の表情がわかりにくい状況ではありますが、スタッフ一同笑顔で、患者さんの気持ちに寄り添う気持ちを大切にしています。そして手術後もできるだけ病室に訪問し、お話が伺えるように術後訪問にも力を入れています。

また、全身麻酔後の硬膜外麻酔や経静脈的自己調節鎮痛法(IV-PCA)を行っている患者さんを対象に、呼吸器合併症、手術後の痛みの軽減、早期離床(早期に起き上ったり歩いたりすること)を目的とし、令和 5 年度より、麻酔科医・看護師・薬剤師・臨床工学技士などの職種で構成された医療チームによる回診「APS (Acute Pain Service)」を開始しています。



【APSの様子】

日々医療技術の進歩がある中、手術室看護師として、様々な手術に対応できるよう、定期的に勉強会やシミュレーショントレーニングを行っています。



【手術室の職員】

3A病棟は救命救急センター 20床と救急外来、透析室10床を有しています。

患者さんの全身管理を行うため、ICUでは人工呼吸器の管理や大動脈バルーンポンピングなど補助循環の管理が重要となります。救命救急医師や診療看護師と協働して患者さんの命を守るため尽力しています。

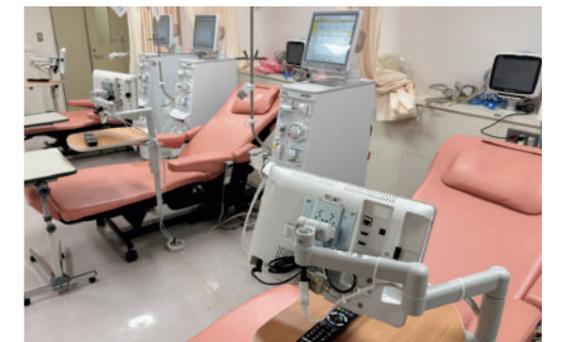


救急外来では、毎月900名以上の患者さんが来院され、救急車は毎月300台以上の受け入れを行っています。さらに、ドクターヘリも受け入れる体制となっており、少しでも早く救命できるように努めています。



透析室では令和 4 年度に増床し、外来の患者さんも人工透析が行えるようになりました。

当センターの58名の看護師の中には、クリティカルケア認定看護師や新生児集中ケア認定看護師、特定行為研修者が在籍しています。特定行為研修修了者は、RRS (院内迅速対応システム) チームにも在籍し、他病棟からの要請を受け、状態変化した患者さんの所へ出向き、病棟看護師と共にアセスメントを行い、異常の早期発見に努めています。部署では「目指そう!ジェネラリスト」をスローガンに掲げ、チーム一丸となり、質の高い看護が提供できるように研鑽しています。また、患者さん、患者さんのご家族は急な状態変化や急な入院に強い不安を抱いておられるため、迅速な治療、看護を実践しながら、家族にも寄り添うことができるような看護を心掛けています。



職場  
紹介  
管理課  
管理課長 西岡 巧



管理課は、庶務係・職員係・厚生係・給与係の4つの係に分かれており、総勢41人の職場です。管理課という名称のとおり、職員の皆さんが働きやすい労働環境を実現できるよう管理することを目標としています。業務は、職員皆さんへの対応のほか電話交換をはじめとする外部の方への対応が中心となります。職員数が大変多い（12月1日現在で1,285人）ので、毎日のように様々な行事・イベントが発生していますが、適切な対応を心がけて業務にあたっています。

各係の業務をご紹介します。

管理課の入口正面にある庶務係では、電話交換、郵便物等の取扱い、職員研修、謝金、出張関係、病院外活動、図書室管理、敷地内の環境整備、庁舎管理を担当しています。その他どこにも属さない業務も含まれており、幅広く対応することが求められる係です。

その右隣の職員係は、休暇関係、健康診断、労働

災害、勤務時間管理を担当しています。日々の勤務時間の管理を始めとして、各種休暇の取得方法など、様々な問い合わせにも日々対応しています。

その右隣の厚生係は、共済組合保険の加入・脱退、傷病手当金などの各種手当金給付や人間ドック補助など職員皆さんの福利厚生に関わる業務を担当しています。

一番奥側の給与係は、給与、採用・退職等の人事異動にかかる各種手続きを担当しています。特に給与については正確な支給が求められる係ですので、適切な支給を目指して業務にあたっています。

管理課の業務に関しましては、日々ご理解ご協力を賜り、この場をお借りして感謝申し上げます。これからも職員の皆さんが働きやすい職場環境となるよう、また、職員の皆様の身近で頼られる存在として、迅速かつ適切な対応を心がけて病院運営に貢献していきたいと思っております。



第28回市民公開講座 がん講演会 について

庶務班長 地田 浩二



令和7年11月24日（月・祝）に呉信用金庫ホール（呉市文化ホール）で、当院主催、呉市の共催で「第28回市民公開講座 がん講演会」を開催しました。今年度は“がん治療の最先端医療～がんを知り尽くす専門医からのメッセージ～”をテーマとし、当院の専門医による最先端のがん治療に関する講演と元プロ野球選手で野球解説者の達川光男さんによる特別講演の2部で構成し、約1,200名の市民の方に来場いただきました。

開会に当たって繁田院長から当院におけるがん診療の取り組みについて挨拶され、続いて、新原呉市長より当院での最先端のがん診療による呉医療圏への貢献につき祝辞を賜りました。

第一部では当院の3名の講師による講演がありました。まず、尾上外科医長から“見たい！知りたいたい！肝臓がんの最新外科治療”と題して、肝臓がんの治療の進歩と最新のロボットや腹腔鏡を使った手術について判り易くお話しされました。次いで吉田内視鏡内科科長より“早期胃癌の内視鏡治療について”と題して、早期胃癌の内視鏡診断、内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)を中心とした内視鏡治療について、その流れと臨床的意義を判り易く解説されました。最後に熊谷産婦人科科長から“手術支援ロボットda Vinci と体にやさしい婦人科がん手術について”と題して、婦人科がん(卵巣がん、子宮体がん、子宮頸がん)に対するロボット手術



も含めた体にやさしい手術について、産婦人科での取り組みを紹介されました。

第二部では、元プロ野球選手で野球解説者の達川光男さんの「苦みを笑いに変えた野球人生」と題して講演されました。講演では、達川さんの現役時代を紹介した映像を放映後、ご自身のがん発覚から治療までのエピソードや広島東洋カープでの現役時での思い出などをユーモアたっぷりの口調でお話いただき、会場も大いに盛り上がりました。まさしく、苦みを笑いに変えることの大切さを示した講演だと感じました。



最後に、大庭副院長から、講師、達川光男さんへの御礼と参加者の方々への感謝の言葉で盛会裏に本年度のがん講演会は終了しました。来年度も市民の皆様へ当院におけるがん治療の取り組みを紹介していきたいと思えます。



## 令和7年度がん看護研修会

副看護部長 坂本 栄美子



当院は、地域がん診療連携拠点病院として、地域におけるがん看護の質の向上に寄与する役割があり、毎年、がん看護研修会を開催しています。

令和7年度は、10月22日～24日の3日間、広島県内のがん医療に携わる病院・施設および中国四国グループ内の国立病院機構病院の看護師を対象に「がん看護の専門的知識・技術を習得し、看護実践能力の向上を図る」を目的として、がん看護研修会を開催いたしました。院内外から28名の参加がありました。

がん医療・看護の基礎知識の習得を中心に、がん患者さんの在宅看護の実際やがん患者さんの社会資源の活用、リハビリテーションやリンパドレナージなどの講義や事例検討、意見交換会を行いました。

受講生は、研修の振り返りや意見交換会の中で、「疼痛緩和において、痛みの部位や程度にばかり目がいていたが、痛みの閾値を上げるためにできることは何か、日常生活への影響はどうか、本人の精神面はどうかなど様々な角度から患者を

捉え評価し、ケアしていく事の必要であることを学んだ。」「悩みを共有する中で、患者さんにとって一番は何かを、皆が模索していることが分かった。」「どの講義でも共通していたことは、患者さん・ご家族が何を感じ、どうしたいと思っているのかを中心に考え看護実践していく事が大切だと学んだ」「今回、研修に参加することで、自身が普段行っている看護の根拠を改めて学び、看護を振り返ることができ、今後どのような看護を行っていきたいか考えることが出来た」などの声が聞かれ、多くのことを吸収していただいていることをとても嬉しく思いました。

個々の患者さんに応じた看護を提供するためには、専門的な知識と技術、そして患者さんを思う心が大切です。今回の研修での学びを各施設で共有し、看護の実践に活かしていただければと思います。



## がん看護研修会内容

### 1日目

- ・がん医療総論
- ・がん患者の栄養管理
- ・がん患者の口腔ケア
- ・疼痛緩和に向けた看護
- ・家族看護と遺族ケア

### 2日目

- ・がん放射線治療の実際
- ・がん放射線治療を受ける患者の看護
- ・がんとせん妄
- ・がん薬物療法の実際
- ・がん薬物用法を受ける患者の看護
- ・がん患者の在宅看護の実際

### 3日目

- ・意思決定支援
- ・がん患者の社会資源
- ・がん患者のスキンケア
- ・がんリハビリテーション
- ・リンパドレナージ
- ・意見交換会



## 令和7年度国立病院機構優秀論文賞

Long-Term Outcomes of Additional Surgery After Endoscopic Resection Versus Primary Surgery for T1 Colorectal Cancer

内視鏡内科 田丸 弓弦

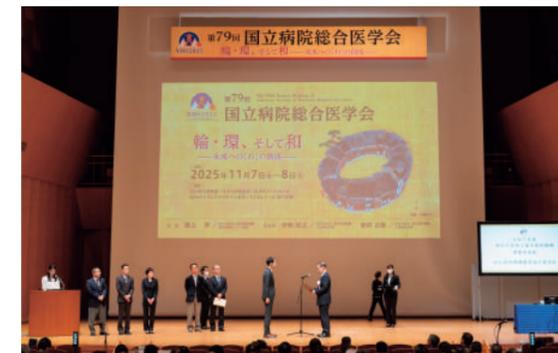


この度は令和7年度国立病院機構優秀論文賞を受賞することができ、誠に光栄に存じます。受賞に際して、2025年11月7日・8日に金沢市にて開催されました第79回日本国立病院総合医学会での表彰式への出席および受賞講演をさせていただきました。私自身初めての金沢市訪問でありとても楽しみにしておりましたが、発表会場が石川県立音楽堂コンサートホールという非常に大きな会場でしたので非常に緊張いたしました。無事に終わることができて安堵しております。日常診療で非常に忙しい中、私の臨床研究にご協力いただきました当院の関係各先生方に感謝をお伝えいたします。

今回表彰していただきました論文の内容は、大腸T1癌（粘膜下層へ浸潤した癌）の治療方針として従来は外科手術が第一選択でしたが、過去の疫学データからT1癌のリンパ節転移率は約10%であり、残りの90%程度の患者さんはリンパ節転移を来していないことから外科手術はover surgery（過大手術）という捉え方もできます。近年の内視鏡診断や内視鏡治療の進歩、高齢社会および個々の患者さんの希望や全身状態の観点から、まず体に負担の少ない内視鏡的切除術（endoscopic resection: ER）を行いその病理学的評価に基づいて追加外科手術（additional surgery: AS）を考慮する症例が増えてきています。しかし、AS前のERが腫瘍学的に悪影響を及ぼすか否かに関しては議論が未だされています。よって、大腸癌研究会のプロジェクト研究である「pT1大腸癌のリンパ節転移の国際共同研究」における大規模観察研究のpost hoc解析として、大腸T1癌に対してER後にASを行った患者さん（AS群）と初めから外科手術（primary surgery: PS）を行った患者さん（PS群）の全生存率を含め

た長期予後の比較試験を行いました。当院を含めた大腸癌研究会のプロジェクト研究に参加している計27施設より集計された大腸T1癌6105症例のうち、外科手術を行った大腸T1癌3132症例を対象として、AS群およびPS群の2群に分けて1：1のpropensity score-matchingを行い、全生存率を主要評価項目として2群（各群1219症例ずつ）を比較しました（AS群のPS群に対する非劣性試験としてデザインを組み、過去の報告から非劣性マージン：1.5に設定しました）。5年全生存率はAS群97.1%、PS群96.0%（ハザード比：0.72、95%信頼区間：0.49-1.08、P=0.1070）でありAS群のPS群に対する非劣性が証明されました。さらに、5年累積再発率はAS群2.7%、PS群2.0%（ハザード比：1.32、95%信頼区間：0.78-2.24、P=0.3040）であり両群間で有意差は認めませんでした。また、再発率、死亡率、原癌死率はいずれも両群間で有意差は認めませんでした。以上の結果から、大腸T1癌に対するAS前のERは患者さんの長期予後に悪影響を及ぼさないことが明らかとなりました。このことからERは内視鏡的に切除可能なT1癌に対する第一選択肢となり得ると結論づけることができました。今後の大腸T1癌の治療方針の一助となる結果が出せたと確信しております。本研究内容は原著論文として米国消化器病学会誌“The American Journal of Gastroenterology”にpublishされました（Am J Gastroenterol 2024;119:2418-2425.）。

今後も国内外問わず研究結果を発信していきたいと思っております。また当科では日常診療を初めとし、最新の内視鏡診断および治療を行っております。今後ともよろしく願いたします。



# 第79回国立病院総合医学会 ベスト口演賞、ベストポスター賞

第79回国立病院総合医学会 ベスト口演賞

セッション	セッションテーマ	演題番号	演題名	筆頭著者姓名	所属機関名
口演 11	認定看護師等の活動	O1-11-4	長期人工呼吸器管理後、多職種介入により3食経口摂取が可能になった一症例	横山 知子	NHO 呉医療センター 7B 病棟
口演 27	小児・成育医療 1	O1-27-1	右腹部痛の診断に苦慮した ACNES の 1 例	上田 周作	NHO 呉医療センター 臨床研修センター部

第79回国立病院総合医学会 ベストポスター賞

セッション	セッションテーマ	演題番号	演題名	筆頭著者姓名	所属機関名
ポスター 43	医療の質 1	P1-43-5	診療記録の質的監査－当院の質的監査における監査者からの評価について	古山 卓也	NHO 呉医療センター 診療情報管理室
ポスター 83	内分泌・代謝性疾患 1	P1-83-5	全身性強皮症の腫瘍スクリーニングにて偶発的に発見された褐色細胞腫の一例	天野 成裕	NHO 呉医療センター 臨床研修センター部
ポスター 148	神経筋疾患 感染症・脳症・発作性疾患	P2-148-1	脳室腹腔シャントが治療導入を可能にした、癌性髄膜腫症の一例	西村 麻里	NHO 呉医療センター 臨床研修センター部
ポスター 184	教育活動	P2-184-2	「障害の理解と共生社会の実現」の講演聴講前後の学生の認識の変化	村川 陽子	NHO 呉医療センター附属呉看護学校

演題名：「長期人工呼吸器管理後、多職種介入により3食経口摂取が可能になった一症例」  
7B病棟 摂食嚥下障害看護認定看護師 横山 知子

第79回国立病院総合医学会、口演「認定看護師の活動」のセッションで演題発表させていただきました。人工呼吸器を装着した状態でも「ポカリを飲みたい」と表出された患者さんの思いを大切に、何か患者さんのためにできることはないか試行錯誤した結果、3食全て経口での摂取を達成した患者さんの症例について発表し、ベスト口演賞をいただくことができました。本症例の発表で評価された点は、看護の力と多職種連携の効果が得られたことです。看護師は日々の患者さんとの関わりの中で色々な思いを聞くことが多いので、患者さんにとってより良い摂取方法がないか考え続けることができればと思います。病棟スタッフにも多くの関わりをもらった症例なので、ベスト口演賞をいただけたことが今後の看護の励みになります。これからも摂食嚥下障害を持つ患者さんの支援を頑張りたいと思います。

主治医・リハビリ科・栄養士の方々の協力がなければ達成できなかったことであり、摂食嚥下支援チームやNSTの皆さまと協働しながらの関わりでした。協力してくださった方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

演題名：右腹部痛の診断に苦慮したACNESの1例  
臨床研修センター部 臨床研修医 上田 周作

この度、2025年11月7日、8日に開催されました、第79回国立病院総合医学会にて、口演「小児・成育医療」のセッションで「右腹部痛の診断に苦慮したACNESの1例」を発表させていただき、ベストセッション賞をいただきました。発表を終えた後はただ安堵しておりましたが、このような栄えある賞をいただき、指導して下さった小児科の先生方、本学会開催にご尽力いただいた皆様に深く御礼申し上げます。

今回発表させていただいた症例報告は腹痛を訴える小児における非特異的愁訴の鑑別、特に見逃されやすい疾患に焦点を当てました。小児期ACNESは報告例が少なく、機能的腹痛や心因性疼痛として処理されがちです。今回の発表を通して診断、治療、複数診療科との連携の重要性について再確認いたしました。

来年以降小児科医として働く中でこの経験を活かし、広く医療現場に還元し、今後も医師として学び続ける姿勢を忘れずに精進してまいります。

演題名：診療記録の質的監査－当院の質的監査における監査者からの評価について  
診療情報管理室 診療情報管理士 古山 卓也

第79回国立病院総合医学会のセッションテーマ、医療の質においてポスター発表させていただき、ベストポスター賞をいただくことができました。

診療記録の質的監査は医療の質向上、カルテ開示対策等の観点以外にも、病院機能評価において近年非常に重

要視されており、特に医師を含めた多職種で監査を行うことが評価基準の一つとしてトレンドとなっています。

当院では、2005年に電子カルテを導入、翌年から医師同士による同僚監査を開始、2022年からは診療録・病歴管理委員会のメンバーや診療情報管理士を加え、多職種による監査を開始しており、監査の歴史は非常に長いものとなっています。

今回アンケートを行い、マニュアルの分かりやすさや監査項目数において80%以上の監査者からは問題ないと評価をいただいている一方で、より分かりやすいマニュアルや適正な監査項目数を求める声もあり、よりよい監査を継続できるよう努めていきたいと思っております。

最後になりましたが、ベストポスター賞をいただけた背景には、日々のお忙しい中監査にご協力いただいている先生方や診療録・病歴管理委員会の方、診療情報管理室の皆様、たくさんの方のご協力があったことだと思います。この場を借りて感謝申し上げます。

演題名：全身性強皮症の腫瘍スクリーニングにて偶発的に発見された褐色細胞腫の一例  
臨床研修センター部 臨床研修医 天野 成裕

2025年11月に金沢で開催された第79回国立病院総合医学会に参加し、「内分泌・代謝性疾患1」セッションにてポスター発表を行い、この度、賞をいただくことができました。当院での研修では、上級医の先生方から手厚いご指導をいただく機会が多く、これまでも地方会等での口演を通じて多くの学びを得て参りました。しかし、ポスター制作に関しては経験が乏しく、構成の組み立て方から手探りの状態でのスタートとなりました。共に学会へ参加した同期たちと試行錯誤しながら準備を進め、無事に当日を終えられたことは、私にとって大きな自信となりました。ご指導いただきました先生方、そして準備期間を共に支え合い、学会のひと時を共有した研修同期に、この場を借りて深く感謝申し上げます。今回の経験を今後の臨床現場に活かし、より一層日々の診療に精進してまいります。

演題名：脳室腹腔シャントが治療導入を可能にした、癌性髄膜腫症の一例  
臨床研修センター部 臨床研修医 西村 麻里

このたび、第79回国立病院総合医学会においてベストポスター賞を受賞することができました。

本演題は実際に担当させていただいた症例で、指導医の先生方より助言をいただき取り組んだ症例発表です。診断に至る過程や手技も含め非常に学びが多かった症例で、強く記憶に残っています。右も左も分からない状態から抄録作成や文献検索、予演等、あたたかく丁寧なご指導を賜り、今後の糧となる貴重な経験をさせていただきました。この場をお貸りして心より感謝申し上げます。

初期研修を通して、これまでに数回学会発表の機会をいただき、演題設定や考察の深め方、発表方法などについて、多くの先生方からあたたかいご指導をいただきました。今回の発表もこれまでに頂戴した学びを活かして臨むことができたものであり、改めて心より感謝申し上げます。

今回の受賞を励みに、今後も一症例一症例を大切にしながら、臨床医としてさらに成長していけるよう研鑽を積んでまいります。

演題名：「障害の理解と共生社会の実現」の講演聴講前後の学生の認識の変化  
呉医療センター附属呉看護学校 教員 村川 陽子

第79回国立病院総合医学会in金沢にて、標記演題でポスター発表をし、ベストポスター賞をいただきました。当校は教科外科目として、入学後も看護職としての内面の成長を目標に、特別講演を設けています。本講演は卒業時到達目標の「調和のとれた社会人となる」「他者の価値観を受容できる成熟した人間性を養う」の達成に繋げ、看護を学ぶ学生が障害を正しく理解し、行動が取れることを願い特別講演を実施しました。

本講演は、もう講師と盲導犬・付き添い者、ろう講師と広島県職員に来校していただきました。学生は、これまで街中で「視覚障害の方に声をかけることに戸惑い、迷惑にならないようにしていた」「手話を知らないのでも声をかけることができない」と距離をおいていたことがわかりました。講演後に「障害のある人は私たちの声掛けを必要としている」「視覚障害者が白杖を高く上げる動作はSOSのサイン」「手話は世界共通ではなく県や地域により方言のように異なる」と理解を深め、SOSに対して「声をかけ助ける」「聴覚障害だからとコミュニケーションを諦めるのではなく工夫して取る必要がある」「手話を覚える」等、支援することを学んでいました。

広島県は「あいサポート運動」として「誰もが暮らしやすい共生社会の実現」を目指しています。当校は広島県とタイアップし、本講演を受けた学生は「あいサポーター」として活動できる資格を得て、あいサポートバッジをいただきました。

当校の学生が視覚・聴覚障害の方と関わる際に、確かな知識と優しさをもって関わるように願っています。本発表にあたり、ご協力いただきましたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。



## 第32回呉地区病院対抗ソフトボール大会に参加し連覇を果たして

臨床工学技士 岩崎 光流



令和7年11月24日（月・祝）に開催された、呉地区病院事務長会主催の「呉地区病院対抗ソフトボール大会」に参加しました。この大会は毎年開催されており、今年で32回目を迎えます。今大会には、呉みどりヶ丘病院、済生会呉病院、マッターホルンリハビリテーション病院、呉中通病院、ほうゆう病院、呉医療センター（2チーム）、木村胃腸内科病院の計7病院・8チームが参加しました。

試合は5イニングのトーナメント方式で、負けた時点で優勝の可能性がなくなるという緊張感の中で行われました。呉医療センターはこれまでも何度か参加してきましたが、なかなか決勝に進むことすらできない年が続き、昨年ようやく優勝を勝ち取ったところです。今年は、その2連覇がかかる大事な大会となりました。



呉医療センターは、大会の都合上AチームとBチームの2チーム（計26名）に分かれて参加し、双方で優勝を目指しました。初戦の相手は、Aチームがほうゆう病院、Bチームが済生会呉病院でした。両試合とも接戦が続き、終盤までA・B両チームともに劣勢で、初戦敗退の危機的状況にありました。しかし、最終回に見事逆転し、両チームとも準決勝に進出しました。

準決勝では、Aチームがマッターホルンリハビリテーション病院、Bチームが呉中通病院と対戦しました。Aチームは勝利して決勝に進みましたが、Bチームは準決勝で敗れ、さらに3位決定戦でもマッ

ターホルンリハビリテーション病院に敗れたため、Bチームの最終成績は4位となりました。

Aチームは決勝に進み呉中通病院と対戦し、初回から順調に得点を重ね、最終的に9-0という大差で勝利を収めました。これにより、無事2連覇を達成しました。

当院のソフトボールチームは、発足から約15年が経ち、メンバーこそ当初とは入れ替わっているものの、リーダーを受け継ぎながら現在まで活動を続けてきました。現在は約40名が所属しており、医師、看護師、薬剤師、作業療法士、理学療法士、放射線技師、臨床工学技士、事務職員など、さまざまな職種がチームの一員として参加しています。練習はオフシーズンを除き、1年を通して毎週火曜日に約2時間行っています。大会は年間2回しかなく、しかも10月・11月の秋季のみの開催ですが、1年を通じて練習を続けることの意味は、大会で勝つためだけではありません。むしろ、職種の垣根を超えた横のつながりを大切にすることにこそ、大きな価値があると思います。実際、在籍するメンバーの中には、練習や試合を通じて他病棟や他職種に知り合いができ、その関係が日々の業務における連携のスムーズさや、気軽に相談できる関係づくりにつながっていると感じている人もいます。こうしたつながりは、様々な職種が在籍する職場においてとても大切なことだと考えております。今後も、こうしたつながりをさらに広げながら、チーム一丸となって練習や大会に取り組み、職場全体のチーム力向上にも貢献していきたいと考えています。



## 第63回 戴帽式を終えて

呉医療センター附属呉看護学校



63回生 齊藤 花音

私は戴帽式を終えて、改めて理想の看護師像を考えることができました。私は小学生の頃から看護師になりたいと思っていました。さらに、看護学校に入学してから戴帽式を迎えるまでの講義や演習を通して、患者さん一人一人に合った看護をしていきたいと強く思うようになりました。教科書通りに知識や技術を身につけて看護をしようと思っただけでは患者さんのためにならないと思います。知識や技術を身につけた上で患者さん一人一人の思いを傾聴し、その患者さんに合った看護をしようと思えます。

また、患者さんの家族の方々も不安になるだろうと感じるようになりました。患者さんやその家族の方と一番近くでコミュニケーションがとれるのは看護師の強みだと思います。そのため、患者さん本人だけでなく家族

の方にも耳を傾けていきたいと思いました。看護師として何が出来るか考え、多職種との連携を取りながら、看護を行えるようになりたいです。そのため、看護学生として学ぶことをこれからも大事にしていきたいと思っています。

ナースキャップを被せていただいた時、一人一人の患者さんに合った看護をしていき患者さんの家族にも寄り添えることができるようにと心に留め、どのような困難にぶつかってしまったとしても、日々の学びを大切に、仲間と助け合いながら、頑張っていきたいと思い、気持ちが引き締められました。これからもしっかり看護を学んでいきます。

今後とも、講義や実習などご指導をよろしくお願い致します。



教育主事からキャップをいただき、担任教員からしっかりピン止め。心引き締まる瞬間でした



テレビ局が取材に来られ、インタビューを受けました



ろうそくの灯を受けつぎ、誓いの詞を全員で唱和しました

# うちの部署の 接遇キラリさん

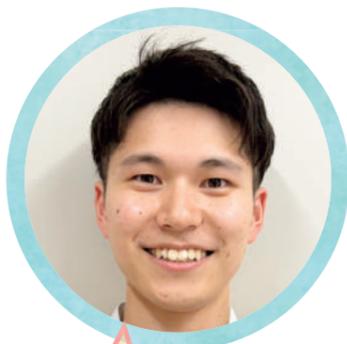


看護部  
5A 病棟  
看護師  
仲井カルラさん

5A 病棟は整形外科病棟です。主に手術を目的とした患者さんが入院されています。交通外傷や長年の骨や関節の痛みを耐え、手術を決意される患者さんもおられます。私たち看護師は毎日、手術前後の患者さんの看護をしていますが、患者さんは初めての入院生活や手術に対する不安を抱えています。看護師だけでなく、医師、理学療法士、作業療法士、栄養士、ソーシャルワーカーなどの職種と連携し、患者さん一人ひとりの思いに寄り添い、安心して入院生活を送れるように、前向きに治療に取り組めるようにサポートしています。私はこれからも少しでも早く入院前の生活に戻れるように日々の関わりを大切に、患者さんが今必要としている看護を見つけていきたいと思っています。

## 原田 看護師長より

仲井さんは、患者さんやご家族に対し、笑顔を保ち丁寧に関わってくださっています。整形外科病棟では手術を受けられる患者さんが多く、元の生活に戻れるかと不安を抱えた方も多くおられます。入院時から患者さん一人ひとりの退院後についても、親身になって考えられており、痛みや辛さに寄り添うやさしさの中に、患者さんのためを思った強さも兼ね備えています。患者さんやご家族からはもちろん、病棟スタッフからの信頼も厚く、どんなことでもきちんと責任をもって行ってくださる頼もしい存在です。子育てとの両立は大変だと思いますが、決して中途半端なことはせず、患者さんのために自分が納得できるまで看護を追求する姿勢は、後輩のよいお手本にもなっています。これからも5A 病棟の看護がさらに良いものになるよう、活躍を期待しています。一緒に頑張っていきましょう!!



看護部  
6B 病棟  
看護師  
森 俊介さん

消化器・内視鏡内科の6B 病棟では1泊2日で治療をされる患者さんから最期を迎えられる患者さんまで様々な病態の患者さんが入院しておられます。消化器の治療をされるため、食事に関する不安を持たれている患者さんが多くおられます。そのような患者さんの思いに寄り添い、不安を少しでも減らし、退院後も含め治療に専念できる環境を提供できるよう今後も努力していきたいです。

## 西井 看護師長より

森君はいつも笑顔を保ち、患者・家族に優しく丁寧な接遇で気持ちのこもったあたたかい看護を行ってくださいます。そのため患者・ご家族からも「今日は森君はいないの?」と気にかけてくださるほどです。疾患、治療、看護の知識も研修に積極的に参加し自己研鑽の姿勢も後輩のお手本になっています。今後も今の姿勢のまま成長してくれることを期待しています。



看護部  
6A 病棟  
看護師  
佐島 清夏さん

6A 病棟では消化器疾患を抱えた患者さんが、手術や化学療法を行うために入院されています。忙しい中でも話しかけやすい雰囲気を作り、患者さんの些細な変化に気付くように意識しています。身体的苦痛だけでなく精神的な苦痛も軽減できるように患者さんの思いに寄り添う看護を大切にし、病棟スタッフで協力してより良い看護を提供していきたいと思っています。

## 岩川 看護師長より

佐島さんは、患者さんだけでなく周りのスタッフにもいつも笑顔で誠実に対応している姿が印象的な看護師です。病棟では忙しい看護士に遠慮をされる方もおられます。佐島さんが心にかけている、話しかけやすい雰囲気を作ろうとする姿勢は、患者さんが遠慮なく思いを表出できるきっかけになっていると思います。



放射線科  
診療放射線技師  
森川 祐介さん

放射線科では、CT、MRI、一般撮影、放射線治療など多くの検査や治療を行っています。私は診断部門で勤務しており、不安を抱えて来られる患者さんに少しでも安心して検査を受けていただけるよう、検査内容の丁寧な説明を心がけています。患者さんがホッとした表情を見せてくださると、短い時間の中でも気持ちが伝わったのだと実感でき、やりがいを感じます。これからも患者さんが安心して検査に臨めるよう、撮影技術と対応力をさらに身につけていきたいと思っています。

## 二見 診療放射線技師長より

森川さんは採用4年目で診断部門の様々な検査を担当してくれています。業務に加えて院内外での研究発表などの研鑽も積極的に行い他医療機関や院内他職種との連携も深まっています。新庄健児（広島新庄高校 野球部出身）らしい、誰にでも礼儀正しく、きびきびとした仕事ぶりは今後の活躍が楽しみな職員です。

## 連携医療機関 紹介

## 谷口クリニック

院長 谷口 正彦



谷口クリニックは、呉市内のかかりつけ医として外来診療、リハビリテーション、在宅医療に携わっています。

### 1, 外来診療

消化器内科、外科を中心として診療を行っております。呉は坂が多い地域であり、高齢の方には通院そのものが負担となることから、送迎用の車両を用意し通院支援を実施しています。

### 2, 運動、リハビリテーション

2階に運動指導・リハビリスペースを設け、生活習慣病や運動器の不調に対して加療を行っております。資格を持つトレーナーによる運動療法を行い姿勢改善・筋力低下予防など、日常生活の質を向上させるための指導を行っています。

また、理学療法士も在籍しており、脳梗塞後や骨折後などのリハビリテーションにも対応しています。

### 3, リンパ療法

資格を持つリンパ療法士によるリンパ外来を行っており、産婦人科手術後や乳がん手術後のリンパ浮腫に対し、生活指導、徒手リンパドレナージュ、弾性ストッキングを用いた治療を行っています。

貴院形成外科、産婦人科からも多数の患者様をご紹介いただいております。

### 4, 在宅医療

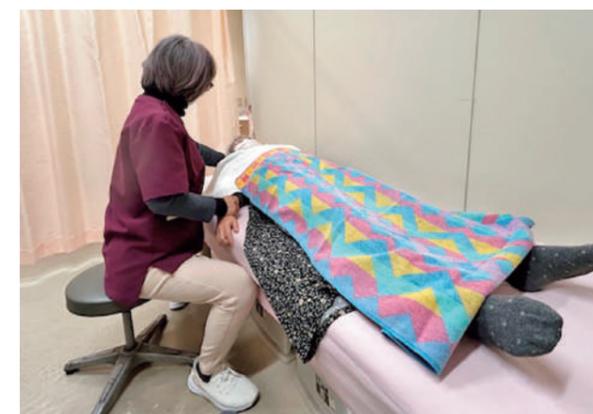
在宅での看取り対応を始め、気切チューブや膀胱瘻の管理、胃瘻の管理や交換、高カロリー輸液管理、施設への往診など様々な患者様に対応しています。

呉は狭い道路が多く、道がどんどん狭くなり進めなくなって道を間違えたことに気づくことも度々です。現在まで脱輪4回、愛車のサクラはまだ最初の車検も受けていないのに傷だらけです（運転が下手なだけでしょうか）。

呉医療センターの先生方からは日頃よりご紹介をいただき誠にありがとうございます。

引き続きご紹介をいただければ幸いです。

今後も呉医療センターとの連携を重視し、かかりつけ医として地域医療に貢献できればと思っております。



## 谷口クリニック

〒737-0052 呉市東中央2丁目8番18号  
院長 谷口 正彦

# 我が家の スターたち



## 保護者コメント

1歳半で通い始めて、先生たちのおかげですぐに慣れてくれて、もう3歳4ヶ月です。  
お散歩で遠くまで自分で歩くと聞いてびっくらしました。  
イベントをしっかり行ってくださることで、家族みんなで子どもの成長を感じることができ、感謝しています。  
年少さんでこの園とお別れするのは寂しいですが、あと少し、娘と楽しみながら通いたいです。

## 旗見 帆葉ちゃん



## 担任保育士のコメント

いつも元気いっぱい、おちゃめなほのかちゃん。  
お友だちや先生とお話するのが大好きで「ほのちゃんね〜」「今日これ着てきたの!」「〇〇ちゃん、一緒にあそぼー!」と毎日楽しそうな話し声が聞こえてきます。  
まだまだ「だっこしたいの〜」とちょっぴり甘えん坊さんなところもあるけれど、頑張る時は頑張る!行事では大きな声でみんなを引っ張ってくれたり、楽しそうに歌ったり踊ったり、とても頼もしいです。  
卒園まであと少しだけど、大好きなことをいっぱいして思い出をたくさん作ろうね!!



## 保護者コメント

入園当初はよちよち歩きでしたが、今ではおしゃべりや自分の支度もできるようになり成長を感じています。  
園の先生や友達が大好きで、最近では毎朝「今日は保育園で何するのかな?」と言い楽しみに登園しています。  
降園後には園での出来事や覚えた歌を歌ってくれ、毎日話を聞くことが楽しみです。これからも元気に成長してね。

## 今井 晃清くん



## 担任保育士のコメント

昆虫&恐竜博士の心優しいこうせいくん。  
「これはバツじゃない、コオロギよ」「これはね〜ステゴサウルスよ」などたくさん教えてくれます!お話がぐんぐん上手になり、フィギュアを動かしながら、友だちとのごっこ遊びも盛り上がっています。  
「こっちで合っとる?」としっかり確認し、くつやズボンも一人で履けるお兄さんです!  
残りのすずらん生活も、元気に楽しくすごそうね!



## 呉医療センターへご寄付をいただきました。

令和7年10～11月に、ご寄付をいただきました。

◆ご寄付 匿名2名

みなさまからの気持ちのこもったご支援をありがとうございました。

## 編集後記

新年あけましておめでとうございます。昨年は皆さまのご協力のおかげで、一年を通じて無事に広報活動を行うことができました。心より感謝申し上げます。

今年はさらに広報活動に取り組み、より良い環境づくりを目指してまいります。皆さまにとっても実り多い一年となりますようお祈り申し上げます。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

(広報委員会)